サエボーグ

JOSHIBI no.203

サエボーグ
アーティスト。女子美術大学芸術学部絵画学科洋画専攻（現・美術学科洋画専攻）卒業。「半分人間、半分玩具」の不完全なサイボーグを連想させるオルター・エゴを名乗り、自らの皮膚の延長としてラテックス製のボディスーツを自作し、装着するパフォーマンスを展開。国内外の国際展や美術館で発表している。第17回岡本太郎現代芸術賞 岡本敏子賞、TCAA 2022-24（Tokyo Contemporary Art Award）受賞。

やりたいことに正直に。その気 持ちだけは持ち続けたい。

牛や豚、羊、犬に害虫――。
自作したラテックスの
着ぐるみを装着し、
パフォーマンスを展開する
サエボーグさん。
その作品は国境を軽々と越え、
見る人の心に問いを
もたらし続けています。
自身のライフワークと
アートシーン。
乖離しているかに思えた
2つがつながったのは、
女子美での出会いが
きっかけでした。

Photo 中野修也　Text 株式会社フリッジ

美大に行きたかったというより、東京に行きたかったんです。もちろん美術は好きだったし、関心はありましたよ。女子美の短大の卒業生である母に連れられて、図書館や展示によく足を運んでいましたから。でも、地元の富山県には観たいマニアックな映画が不足していて、美術の話ができる友人もいなかった。今ほどインターネットも普及していない時代ですから、情報源といえばもっぱら雑誌です。誌面から溢れ出す90年代の東京は実にエネルギッシュで猥雑で、「絶対この目で見なければ！」と焦がれていたものです。

女子美に合格すると、浪人生活を終えた解放感も手伝って、東京で夜遊び三昧です。フェティッシュパーティーの「デパートメントH」をはじめ、サブカル系イベントにクィア系イベント……。コスプレ衣装やラテックスの衣装にはその頃から手を伸ばしていました。楽しんだツケとして卒業ぎりぎりまで必死で授業に出ることになるわけですが、そんな4年次の春に大きな出会いがありました。美術批評家の杉田敦先生が女子美に赴任されたのです。先生の読者だった私は、すぐさまシラバスで先生の授業を確認してみることに。すると、ものの見事に知らない作家の名前ばかりがずらり。他の学生よりも作家に詳しい自負があったのに、これはまずい。焦って杉田先生のすべての授業とゼミを履修登録しました。

当時の私は、既存のアートの枠組みの中で何をつくっていけばいいのか見つけられずに苦しんでいました。漠然と作家に憧れながら、具体的なビジョンは何一つ描けない。就職氷河期も重なって、卒業後はアルバイトに明け暮れました。一方でフェティッシュパーティーには相変わらず全精力を注ぎ込んでいたのです。「パーティークイーンはこの私、誰にも負けない！」という意気込みです。衣装も既製品では飽き足らず、オーダーするほどでした。杉田さんの元にもよく出向き、美術の話や悩み相談をしていました。

ある時、そんな私に杉田さんが言ったんです。「サエちゃんはフェティッシュ

パーティーには当たり前のように行けるのに、展示は当たり前のようにできないのだね」と。もう腹が立って！（笑）挑発に乗って初めての展覧会を開きました。でも、その時に感じたことは「お金がもったいない」だったんです。「本気の趣味である着ぐるみのオーダーメイドには、大金をかけてもまったく惜しいと思わないのに。

翌年、杉田さんの誘いで今度は女子美のギャラリー「ガレリアニケ」での企画展『gender game』に参加しました。当時にしては珍しくジェンダーをテーマにした催しで、杉田さんから着ぐるみの展示を勧められて「あれはアートじゃないのに」と困惑したのを覚えています。しかし準備やトークショーなどに取り組む中で、徐々に考えが整理されていきました。アートか否は重要じゃない。私は切実に、本能的に着ぐるみが必要だからつくるんだ、それでいいんだと、目の前が開けたんです。本腰を入れて着ぐるみを手作りするようになり、年に1回「デパートメントH」で新作を発表していきました。

家畜というモチーフもその過程で見つけました。「デパートメントH」では大抵の人が格好良くて強そうなものに扮装するんです。私もその真ん中で輝きたくて、20センチのハイヒールを履いてみたこともあります。でも、強がって大きく見せたってハリボテに過ぎないんですよね。それならばと、逆張りの発想で選んだのが家畜です。「皆が自由を謳歌して輝くなら、私は不自由で管理された最弱の存在になってやろう。そういう無力な存在が、別のパワーを持つのではないか」という企みです。最初が牛、次に羊、鶏、ファーマーガール、直立歩行の豚と続きました。

初期の代表作は『Slaughterhouse』。意味はそのまま、屠畜場です。着ぐるみの牛が搾乳され、豚からは肉の、羊からは毛皮のパーツが剥ぎ取られ、鶏の着ぐるみは卵を産む。家畜を管理している側のファーマーガールは最後にストリップをする……。それぞれが生まれた時から課せられている役割をショーの中で見せていくんです。この作品で2014年に第17回

岡本太郎現代芸術賞 岡本敏子賞を受賞し、アートシーンにおける実質的なデビューを果たしました。

活動を通して家畜という存在を深く掘り下げていくうち、『Slaughterhouse』でピックアップした屠畜は最後の一瞬でしかないこと、「管理・屠畜」の暴力性だけをハイライトにするのは違うということに気づきます。人と家畜は長い時間を共有し、さまざまな形の関わりを持つものだと知ったのです。２０１９年、オーストラリアのアートフェスティバル『Dark MOFO』に参加した際にタスマニアの野生生物保護施設を訪ねたのも転機になりました。自動車事故で傷ついた動物たちが飼育されている施設で、みんなすごく人懐っこく接客してくれる。その経験を通して、もっと繊細なテーマとして、人間がケアし続けなくてはならない存在でもあることや、生政治に内包される問題としての「情」の政治があると気づきました。それが同年の『あいちトリエンナーレ２０１９』で発表した『House of L』につながります。巨大な母豚が産んだ子豚に観客がミルクを与えたり、家畜と観客が一緒に歌ったりダンスをしたりと、ケアの視点や、人間と動物の境目を問う参加型パフォーマンスです。Tokyo Contemporary Art Award ２０２２-２０２４の受賞記念展で発表した『I WAS MADE FOR LOVING YOU』では、観客に委ねる範囲をさらに拡大しています。現れるのは、衰弱した一頭の犬の着ぐるみ。どう向き合うかは観る人によって異なります。慰めたり、悩みを話そうとしたり、一緒に涙を流したり……。作品が観る人自身を映す鏡になるんです。

作品のテーマだけでなく、パフォーマンスへの考え方も変わってきました。がんばって演じようとするより、素を出していくほうが面白く見えるみたい。生き物にいいも悪いもないのと同じで、パフォーマンスに上手いも下手もなく、愛があることのほうが重要。そして私が観客に差し出すものと、観客が持ち寄るものが出会い、うまくミックスしたときに素晴らしい儀式が立ち現れるんです。この奇跡のような瞬間を何度も味わっているので、パフォーマンスはやめられません。

海外から多くのオファーがあるのは、国際社会のトレンドとシンクロできたおかげもあるのでしょう。アジア人女性が動物の着ぐるみでパフォーマンスすることはさまざまな文脈から解釈されます。例えば脱人間中心主義に紐づくアートシーンの脱ヨーロッパ中心主義や、クィアネス、ジェンダーフェミニズムに動物福祉……。家畜というモチーフは深遠で、私自身は考えの及ばなかった解釈をされることもしばしばです。

経験を通して自分自身の考え方もどんどん変わる中、ずっと大切にしているのは初期衝動です。自分の欲望から生まれ出ないもの、キャラクターの「早く作れ」という声が聞こえないものは作らない。私が心底求めているのは、権威ある舞台に立つことでも名声を得ることでもありません。自分の中から湧き上がる新しいスーツなんです。発表の場を選ぶ基準も、招待されて「わあっ！」と心が躍るかどうか。行ったことのない国や素敵そうな町、「イケてんじゃん」と感じるイベントには参加すると決めています。

最近は学生から将来について相談されることも増えたのですが、伝えたいことはやっぱり同じです。周りの評価や物差しにとらわれず、自分がやりたいと思えることを素直にやるのが一番。他の人から無駄だと言われても、気にしなくていいと思うんです。輝くような宝物は、一見無駄でくだらないものの中にこそ現れるものですからね。

「Slaughterhouse」
（グルベンキアン近現代美術館、ポルトガル、2024）撮影：Pedro Pina

「Pigpen」
（DARK MOFO 2019、ホバート、オーストラリア）

「あいちトリエンナーレ2019 情の時代」
（愛知県芸術劇場、2019）撮影：蓮沼昌宏

「『I WAS MADE FOR LOVING YOU』
Tokyo Contemporary Art Award 2022-2024 受賞記念展」
（東京都現代美術館、2024）
撮影：高橋健治　画像提供：Tokyo Arts and Space

「機本ロマンス×サエボーグ『パワーチキン』」
（東京芸術劇場、2026）撮影：都築響一

MESSAGE

新入生に向けて

01

学校法人女子美術大学
理事長　福下 雄二

新入生の皆様、ご入学おめでとうございます。心からお慶びと歓迎を申し上げます。

本学は、昨年２０２５年に創立１２５周年を迎えた、私立の美術大学としては最も古い歴史と伝統を誇る大学であります。

創立以来「芸術による女性の自立」という建学の精神の下、女性のための美術教育にまい進し、あらゆる世界で活躍する数多くの卒業生を輩出してまいりましたことは本学の誇りとするところであります。

これからは、皆様の新しい力によって一層輝かしい歴史と伝統を築き上げていっていただくことを期待しております。

これからの大学生活では、それぞれの学科や専攻領域において研鑽を積まれますとともに、良き先生に巡り会い、良い友人に恵まれるよう努力していただき、充実した実り多い大学生活を送っていただきたいと思います。

女子美術大学
女子美術大学短期大学部
学長　小倉 文子

新入生の皆様、ご入学おめでとうございます。１９００年に創立した女子美術大学は〝芸術による女性の自立〟〝女性の社会的地位の向上〟〝専門の技術家・美術教師の養成〟を建学の精神に掲げ、これまでに多くのアーティストやクリエイターを輩出してきました。また、起業する卒業生も多く、職種も多岐にわたります。専門分野の知識と技術の習得、充実した教養教育の学びから考える力、生きる力を身に付け活躍の場を広げた結果といえます。

学生生活は学科専攻領域を越えて自由に参加できる産官学連携プロジェクトや異分野と協働で行うプロジェクトが多数あります。また、海外で行う研修や留学制度なども充実しています。行動することでたくさんのモノと出会い、たくさんの人とつながります。正課授業で習得する知識や技術に加え、正課外のプロジェクトに参加することで出会うモノやコトを最大限活用し、社会とつながり、学科を越えた仲間たちとともに体験を通して成果を上げられることを期待しています。

短期大学部部長
佐藤 真澄

芸術学部長
清水 美三子

大学院美術研究科長
奥山 亜喜子

副学長
後藤 浩介

副学長
松本 博子

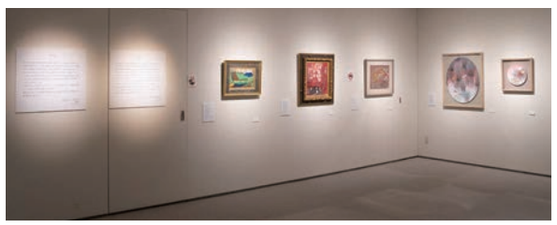
女子美術大学創立125周年記念展
― 教え育まれてきた才能たち ―（明治から令和へ）

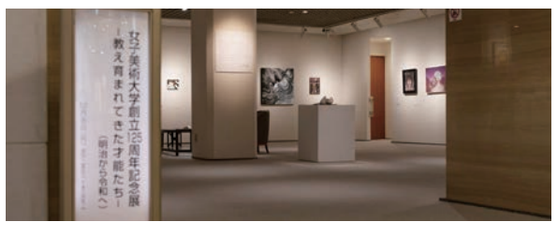
明治から令和に至る本学ゆかりの30名による作品を展示しました。

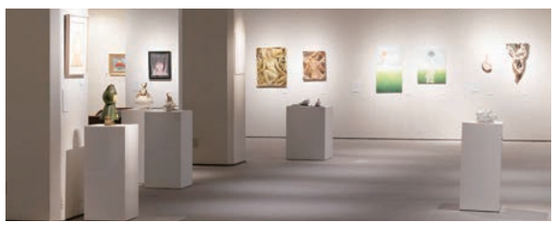
会期：2025年12月3日（水）～ 12月8日（月）　会場：日本橋三越本店 本館6階美術特選画廊

出品作家

三岸節子、片岡球子、堀文子
安齋茉由、大河原典子、大小島真木、奥村巴菜、菅野静香、清川漠、工藤麻紀子、呉亜沙、後藤瑞穂、後藤夢乃、小松美羽、齊藤彩、下重ななみ、杉田万智、杉山愛莉、曽谷朝絵、平良光子、丁子紅子、つのだゆき、戸田沙也加、中村萌、流麻二果、東麻奈美、藤井聡子、藤原由葵、森村智子、横山芙實







MESSAGE

新任教員からみなさんへ

02

菅野静香 Shizuka Kanno

令和8年4月任用

芸術学部 美術学科
洋画専攻 特任講師

東京都生まれ。画家。女子美術大学大学院洋画研究領域修了。油彩画制作および展覧会開催を中心に活動。作品が文化教育施設に収蔵されているほか、装画や食品パッケージのアートワークも手がける。女子美術大学専任助手、女子美術大学、横浜美術大学、武蔵野美術大学非常勤講師を経て現在に至る。

私は制作中に「こうしなきゃ」にとらわれて視野を狭めたり、正解を求めすぎて方向性を見失うことがあります。そして「大切なことはまず目の前のこれを自分が好きだと思える形にすることだった」と立ち返ります。迷い立ち止まった時は「自分がこれを好きだと思えるか」という原点に戻ってみてください。大学という場所は多くの視点にさらされ、時には指導を厳しく感じることもあるかもしれません。しかし、それは「自分だけの好き」に閉じこもるためではなく「自分が本当に納得できる形」をより高いレベルで実現するための手がかりを得るプロセスです。評価や正解に自分を合わせるのではなく、それらを栄養にして、自分の内にある「納得」をたぐり寄せること。好きという感覚を羅針盤にして、大学生活を自分を育てる贅沢な時間だと思い楽しんでください。

大友 学 Gaku Otomo

令和8年4月任用

芸術学部 デザイン・工芸学科
プロダクトデザイン専攻 特任教授

早くから独立し、多数のコンペ受賞を通してプロダクトデザインの世界へ入門。2008年デザイン事務所を設立。デザインは目的のための道具という考えのもと、「デザインのその先」を意識した視点からのクリエイションを志向しながら様々な企業やメーカーの商品開発に携わる。グッドデザイン賞、プロダクトデザインコンペ等受賞多数。2020 ～ 2022グッドデザイン賞審査員。

学生時代、熱心にコンペに取り組む講師がいました。大賞を獲り賞金を自慢する彼は「悔しかったら獲ってみろ！」と檄を飛ばします。私たちを当然のように「未来のデザイナー」と認識しながらの彼の指導は、プロへの強い憧れと、私自身の未来へのワクワクを否応なく掻き立てるものでした。技術や知識などの基本はもちろん大切ですが、抗えない程のワクワクや期待など、未来への「楽しいモチベーション」を持つことはとても大切。ぜひ4年間で自身のワクワクを大きく育ててもらいたいと思っています。そもそもデザインは個性や感性を活かすことが求められる数少ない仕事のひとつ。授業では自分の個性を認め、安心して試し、存分に表現できる環境をつくることが目標です。そして、かつてもらったあのワクワクを「未来の自分へのお土産」にしてもらえるような体験を後押ししたいと願っています。

下田倫子 Tomoko Shimoda

令和8年4月任用

芸術学部 デザイン・工芸学科
環境デザイン専攻 専任准教授（教育・研究）

女子美術大学芸術学部デザイン科環境計画専攻卒業。イーストロンドン大学建築学科ディプロマ課程修了。quad design architects一級建築士事務所共同設立。女子美術大学にて博士（美術）学位取得。地域連携プロジェクトを通じて、都市と農村の景観や地形と人びとの暮らしに関わる環境デザインの研究を行っている。

人にやさしく、自然にやさしいかたちとは何か。それは目に見えるかたちをもっているものもあれば、そうでないものもあります。この問いを日々の学びの中で大切にしてください。通学路や大学のキャンパスの風景の中に、どのような人と自然の関係性を見いだすことができるでしょうか。そこには、長い時間の中で蓄積されてきた人びとの社会や環境に対する問いと、その応答としてのかたちが表れているといえます。人と人、人と自然、そしてそれらと社会は相互に関係し合いながら、私たちを取り巻く環境を形づくっています。女子美術大学でアートやデザインを学びながら、思考力・想像力・実行力を育み、それぞれの専門性を生かして、私たちに何ができるのかを一緒に考えていきましょう。その過程の中で、みなさんが思い描く社会や環境のかたちが、少しずつ未来の風景として見えてくるはずです。

三好由起 Yuki Miyoshi

令和8年4月任用

芸術学部 アート・デザイン表現学科
メディア表現領域 特任教授

日本IBMでLCD開発と企業との設計プロジェクトにエンジニアとして17年携わる。現在、美術家として、その場所の自然光や大気などの科学現象や環境音で構成する体験型の空間作品を創っている。miyoshi_makita でも活動。中之条ビエンナーレ、東京都美術館、広島市現代美術館、Arsenale Nord, Venice 等 展示多数。野村財団芸術文化助成 等。名古屋大学工学研究科修了（修士）。多摩美術大学造形表現学部卒業。

無駄や失敗を恐れず学んでください。遊びも大切です。好きな音楽や本、好きな事が固まるのはこの辺りの時期だったりします。効率や近道は次でいいのです。私は一つ目の大学で大きな挫折をしました。一方で、好きな事を見つけ、譲れない核を見つけ、世界と自分との関係が見えてきた時期でした。私は理工系でしたが、科学と自分との関係について考え「ガラス上の薄膜干渉がオモシロイ」に取り組んだのは、二つ目の大学（美大）からです。私は、女性を差別するために科学をもちだす人に辟易していたこともあり、科学が「オモシロイ」というシンプルな感覚ですら伝えることに慎重でした。私の「オモシロイ」に耳を傾けてくれたのは美大のクラスメイトと先生方でした。つまりはこの大学環境を存分に活用していただきたいと思うのです。

山本 薫 Kaoru Yamamoto

令和8年4月任用

芸術学部 共創デザイン学科
特任教授

ストラテジックプランニングディレクター。広告会社で働くかたわら、2020年社会人学生として武蔵野美術大学大学院クリエイティブリーダーシップコース修了。広告コミュニケーションから商品・サービス開発まで幅広く手掛け、人間理解を基盤としたデザイン思考のアプローチを得意とする。2023年「備蓄食品ギフトアンドストック開発」でグッドデザイン賞受賞。

美大で過ごす時間は、知識や技術を習得するだけでなく、自分自身の「好き」や「気になる」といった感性を社会の課題とどう接続させるかを模索する貴重な期間です 。皆様が取り組む課題は、正解のない問いです。創作や研究の過程で思い悩むこともあると思います。けれどもそうやって悩みながらも、社会のどこかで生活している誰かの気持ちに寄り添い、新しい価値を創り出そうとするアートやデザインの力こそ、今最も必要とされている資質です。自分の感性を信じて頑張り続ければ、卒業までにはきっと自分だけが生み出せる何かが形になって社会に発信できるはずです。これからどうぞよろしくお願いいたします。

柳 太漢 Yoo Taehan

令和7年9月任用

芸術学部 共創デザイン学科
特命准教授

アクセンチュア株式会社では、デザインディレクターとして、様々な企業のプロダクト・サービスの開発、事業・企業変革を支援。ブランディング、サービス領域でRed Dot Design Award、iF Design Awardなどを受賞。2025年、英国D&AD AwardsではNew Brand Identity部門の審査員も務めた。

自分の人生の中で、もっとも忘れられない時期はいつか?と問われれば、大学時代だと即答すると思う。きっと皆さんも、長い年月が経った時、そうやって大学時代を振り返るのではないかと思っています。友人との出会い、本気の恋愛、バイトに精を出したこと、目的もなくただ友人とキャンパスで時間を共有し合ってた日々、その全てが「なんてかけがえないことなんだ」と気づくと思います。それは、他者には（AIにも）到底コピーできない、あなただけのユニークな体験と、感情の起伏の日々です。その中のひとつに、女子美で学んだ時間が加えられるよう、皆さんにとって意味のある学びの場を作っていきたいと思います。よろしくお願いします。

東條莉穂 Riho Tojo

令和8年4月任用

芸術学部 共創デザイン学科
特任講師

女子美術大学芸術学部デザイン・工芸学科ヴィジュアルデザイン専攻卒業。株式会社オリエンタルランドにて10年以上、東京ディズニーリゾートにおける空間デザイン業務に従事。イベント装飾、サイングラフィックス、プロダクト、ホテルやアトラクションの内装・建築、大規模プロジェクトのデザイン監理・推進などを担当。

大学生活では、正解に近い答えを導くことよりも、自分なりの問いを見出すことを大切にしてほしいと思います。好き嫌い、違和感、関心の偏りなどにはその人ならではの思考の起点があります。それらを感覚のままに留めず、なぜそう感じるのかを丁寧に言語化し、要素同士の関係を構造的に捉えることで、自分軸は鍛えられていきます。表現やデザインとは、単に見た目を整えることではなく、自分の視点を社会に対して提示することでもあります。流行や周囲の評価に安易に合わせるのではなく、自分にしか見えない問いを掘り下げ、それを他者や社会に伝わる美しい表現へと育てていくことを、大学でのかけがえのない時間の中で培ってください。迷いながら考え抜いた時間が、必ずあなただけの表現の厚みをつくります。

水尻自子 Yoriko Mizushiri

令和8年4月任用

短期大学部 造形学科
デザインコース 特任准教授

女子美術大学短期大学部・芸術学部卒業。以降アニメーション作家として作品を発表しながら、広告や展示映像等の制作を手掛けるなどして活動。近年の短編作品として、カンヌ国際映画祭監督週間で上映された『不安な体』、ベルリン国際映画祭短編部門で銀熊賞を受賞した『普通の生活』などがある。

いやー、世の中いやなことや苦しいことが多くて、人生ってなかなか大変ですよね。いつの時代もそうでしょうが、これからの時代を歩むのは、より一層大変なことのようにも思えます。生成AI、効率化、利便性の追求…。先へ先へと急ぐ世の中の目まぐるしい変化に「どう幸せに生きたらいいんだよ」と息苦しくなることもあるかもしれません。でも、そんな中でも確かな希望はあります。自分だけの「夢中になれる何か」を持つこと。それだけで、人は驚くほど強くなれます。急がず、じっくり。やわらかな感性を持ち、自分の中の熱量を大切に育て、どっぷり浸かっていく。ここ女子美で、皆さんがその「熱」を見つけて形にするお手伝いができれば、私もめちゃくちゃハッピーです。

退職された先生方

芸術学部	美術学科	洋画専攻	教授	岸 鹿津代
芸術学部	美術学科	洋画専攻	教授	廣瀬晴美
芸術学部	デザイン・工芸学科	プロダクトデザイン専攻	教授	春日亀美智雄
芸術学部	デザイン・工芸学科	環境デザイン専攻	教授	横山勝樹
芸術学部	アート・デザイン表現学科	メディア表現領域	特任准教授	佐藤暁子
芸術学部	アート・デザイン表現学科	ファッション表現領域	特任准教授	西山景子
芸術学部	共創デザイン学科		准教授	唐見麻由香
短期大学部	造形学科	デザインコース	教授	伊勢克也

LONDON

伊藤 愛

パタンナー

RI STUDIO SS 2026 Short Drapey Trench Coat

RI STUDIO SS 2026
Drapey Barrel Trousers

Q1 海外で活動するようになったきっかけは？

女子美短大の専攻科服飾専攻を修了後、オンワード樫山（現 オンワードホールディングス）にデザイナーとして入社しました。同社には海外事業部があり、海外で働く先輩を知るなかで、わたしもいつか海外で働いてみたいと漠然と思うようになりました。その後、ご縁があって女子美術大学の助手を4年間務めさせていただきました。その時の学生達の熱心な作品づくりに大いに刺激を受け、もう一度学び直したい、次は海外で挑戦してみたいという思いが強くなり、ファッションの専門性の高い大学を受験してロンドンに渡りました。LCFのMA Fashion Design Technology（Womenswear）を修了し、夢であった海外でのデザイナー職に就きました。その後パタンナーに転身し、現在に至ります。

Q2 女子美に進学した理由は？

小さい頃から絵を描くことや、モノづくりをするのも好きでした。高校生の時に絵画教室に通って美術大学をめざすようになりました。当時はプロダクトデザインをやってみたかったのですが、ことごとく受験に失敗。唯一合格できた女子美に入学しました。服飾のことはまったく詳しくなかったけれど、女子美は基礎の基礎から教えてくれる学校でした。海外の大学ではここまで丁寧な指導が受けられることはないので、改めて女子美で学んだ基礎がすべてだなぁ、と思います。

Q3 女子美時代はどんな学生でしたか？

短大の服飾デザインコースに所属していました。入学当初のわたしはファッションのことをまったく知らなかったので、女子美の個性豊かな友人たちからもたくさん刺激を受けました。根が真面目なので、課題という課題は真面目に取り組んでいたと思います。次第にファッションの世界に興味が湧いてきて、いつしかデザイナーをめざすようになりました。短大の2年間はあっという間で、当時、山本耀司先生の授業を受けたくて専攻科に進みました。世界的なデザイナーから直接ご指導いただけたことは一生の宝物です。

Q4 女子美時代の、特に印象深い思い出は？

女子美祭です。専攻科の時、クラスメイトのみんなで学生主体のファッションショーをしました。作品制作の傍ら、ショーの構成や音楽などを、一から作り上げたことが楽しかったです。女子美祭は他の学科の作品にも触れられるので、毎年楽しみにしていたのを覚えています。

Q5 制作する上で大切にしていることを教えてください。

私は現地企業で働くサラリーマンなので、自分に求められていることに応えられるよう、日頃から意識しています。ファッション業界は特にスピードと正確さ、さらにコストを抑えることが求められ、環境の変化もめまぐるしく、いかにサステイナブルに仕事ができるかが昨今の課題です。制作は個人の技量ですが、その先にはビジネスがあります。組織の一員として働いているので、周りの人とコミュニケーションをとりながら円滑に進めることが大切です。わたし自身も、まだまだこの点においては語学を含め日々勉強中です。

Q6 海外で働くことの魅力とは？

ロンドンで働いていて感じることは、社会に多様性が根付いており、本当に働きやすい環境が揃っていること。仕事は基本的に自主性が尊重され、任されているので、自分のペースで進められる。それが楽しいです。その分、信頼を失わないよう心がけています。日本に比べてやはり自由であり、そしてワークライフバランスが取れています。子育てをしながらでもフルタイムで働ける環境がありがたいと感じる日々です。

Q7 大学時代にやっておくべきことついてアドバイスをお願いします。

学生時代はとにかく自分の時間がたくさんあります。人生でこの時こそ恵まれた時間はないと思います。自分の夢に向かって役に立ちそうなことはどんどん積極的に経験してください。やっておくべきこと、おすすめは海外旅行です。学生ならお金はなくても若さで多少はカバーできますからね。外国人として海外を旅行することで、文化の違いを体験し、日本の常識から離れ、視野が広がります。そして日本を外からみることで、改めて日本の良さを再認識できます。また、日本の大学と海外の大学を比べると、日本の大学のほうが指導がきめ細やかで、施設利用の自由度なども高いです。ですので、日本の大学でできることを、自分の研究に大いに生かしてください。

Q8 やりたいこと、夢を実現するためのヒントを教えてください。

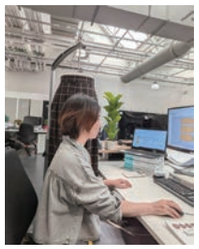
「いつか海外で働きたい」と思っていた自分は、ひとつの夢を叶えたことになりますが、そこには「運」があったと思います。それは人とのめぐり合わせだったり、チャンスやタイミングだったり。わたしが実践していたのは、自分の夢を周りの人に話し、理想の未来を想像していたことです。そして、人との交流の輪を広げておくこと。それが思いがけない機会につながったりするので、積極的に行動してほしいです。そして、夢を諦めずに自ら行動することで、運を掴んでほしいと思います。

Q9 女子美生にメッセージをお願いします。

女子美生という今を思いっきり楽しんでください。仕事の世界に入ると毎日のスピードが速く、なかなか自分の作品を振り返ったりすることが難しいです。学生の頃、制作で試行錯誤しては一喜一憂していたのが懐かしいです。皆さんが日本のみならず世界で活躍できますよう、一卒業生として応援しております。

RI STUDIO SS 2026 Drapey Barrel Trousers

RI STUDIO SS 2026
Short Drapey Trench Coat



伊藤 愛（いとう・ちか）

パタンナー。
2000年、女子美術短期大学専攻科服飾専攻修了。修了制作賞受賞。同年、オンワード樫山（現オンワードホールディングス）にデザイナーとして入社。2003年から2007年まで女子美術大学芸術学部ファッション造形学科にて助手を務める。2007年に渡英。2012年、University of the Arts London（UAL）London College of Fashion（LCF）のMA Fashion Design Technology（Womenswear）をDistinctionで修了。同年、卒業コレクションをロンドンのV&A Museumで発表。上海ファッションウィーク（中国）、Mittel Moda Fashion Award（イタリア）ファイナリスト。卒業後は、ロンドンでデザイナーとして就職し、その後Swash London Ltd.でパタンナーに転身。ASOS.com、Atsuko Kudoを経て、2022年よりRiver Island（https://www.riverisland.com/）パタンナーとして活躍中。

企業で働く、そんな未来。

Vol.08

赤城乳業株式会社

「遊びましょ。」を企業メッセージに掲げる、ガリガリ君でおなじみのアイスクリーム製造メーカー。老舗メーカーでありながら、遊び心のある独創的な商品開発が特徴。チャレンジ精神を社風に、若手から活躍できる場が用意されている。

https://www.akagi.com

芸術学部
アート・デザイン表現学科
メディア表現領域
2015年3月卒業

平井佳奈子さん

開発マーケティング本部
マーケティング部
デザインチーム

デザインを仕事にしたい。そんな思いで、映像から印刷まで幅広く学べる女子美のメディア表現領域へ進学しました。やりたかった仕事は、「生活に必ずしも必要はないけれど、それがあると楽しいものをつくること」。玩具メーカーを中心に受けていましたが、就職活動はあまりうまくはいっていませんでした。そんな中、たまたま目に入った求人票をきっかけに、赤城乳業の会社説明会に参加しました。漂うワクワク感に、「ここでなら楽しくて新しいことができるかもしれない」と興味を惹かれました。

デザインしたものを手にとってもらえる喜び

赤城乳業では、デザインチームに所属しています。主にパッケージデザインを担当していますが、特に印象に残っているのは「かじるバターアイス」という商品です。アイス自体の企画開発をしたのが同期メンバーだったため、ふたりで話し合いながらデザイン作成する時間も楽しいものでした。発売直後は売り切れ続出で、ここまで爆発的に売れるとは思っていなかったので、反響にびっくりしましたね。こういったパッケージ以外にも、デザインチームでは展示会で使用するポスターやスーパーなどに設置するPOPなど、デザイン全般を担っています。

店舗に自分がデザインしたパッケージが並んでいるのを見ると、嬉しい気持ちになります。お客様が手に取ってくださっているのを見ると、さらに嬉しさ倍増です。かじるバターアイスが発売された時には、友達からLINEで「これデザインしたの?」と聞かれたりもして。嬉しかったですね。

チャレンジ精神が根づいた職場

赤城乳業には、新卒で入社して11年ですが、風通しのよい職場だなと感じています。意見交換が活発ですし、若手の頃からさまざまな仕事を任されます。企業ロゴの上に「遊びましょ。」と書いてあるのですが、面白いことにチャレンジしよう、という精神が社風として根づいているんです。もちろん、やらないと怒られるわけではないですよ(笑)。でも、もっと面白いことをやろう!って。そういった姿勢は社員、役員関係なく皆持っていると思います。

芸術学部
デザイン・工芸学科
ヴィジュアルデザイン専攻
2021年3月卒業

最上日菜乃さん

開発マーケティング本部
マーケティング部
マーケティングチーム

大学時代は相模原キャンパスでしたが、のびのびした環境が好きだった一方で、進んで外に出なければという意識がありました。デザインルームに所属して外部のお仕事をしたり、コンペに出したり。課外活動にはたくさん挑戦していたと思います。特に記憶に残っているのが、粟辻先生の授業です。パッケージデザインの課題でつくった作品が地元の食品のパッケージコンペに入賞しました。それまでは洗練された広告グラフィックに惹かれていたけれど、先生にズバッと「食品はおいしそうじゃなきゃダメだよ」って言われて。その時に初めて、食品パッケージの基礎の基礎を知った!と思いました。

デザイナーからマーケターへ

赤城乳業には、デザイナーとして入社しましたが、入社2年目で突然、マーケティングチームに異動になりました。社内でも初めてだったそうで、最初はすごくびっくりしたんです。でも、実際にマーケティングの業務をやってみると、実は学生時代にやっていたこととそんなに変わらないなと思えてきました。一から何かを考える、それは女子美で培ってきたことを十分に生かせるものでした。ほかにも、プロモーションに携わったり、SNS運用をしたり。そのなかでたまに自分でデザインをつくることもあります。業務の幅が広がったことは、自分に合っているというか、糧になっています。

初めて企画した商品が大ヒット

マーケティングチームに移って最初に企画したのが、「トッピンぎゅ〜!」という商品です。この商品は、最初はすごく反対されました。こんなの売れるかって(笑)。でも、いざ発売したら、カラースプレーが好きな人が実はたくさんいらっしゃって。SNSでも話題になり、発売早々に終売になるほどでした。自分の企画した商品に反響が出るのは、本当に嬉しい。もちろん失敗した商品もいろいろあります。ギャルアイスとか……(笑)。

赤城乳業に入社を決めたのは、アイスが好きというよりも人柄というか、社風なんです。若手からチャレンジして活躍できる環境があるのは、やっぱりやりがいがあります。デザイン知識を持ったマーケターは珍しいと思います。だからこそ、自分の力を生かして自分にしかできない仕事をしていきたいです。

採用担当者の声

人財開発部
冨田泰成さん
(赤城ホールディングス株式会社)

赤城乳業が求める人材は?

赤城乳業の開発職の面白いところは、早ければ入社1〜2年目から自分が開発した商品を世の中に出すという経験を持てることです。若手からの活躍というのは口だけではなく、本当に入社後すぐに活躍できる環境があります。だからこそ、チャレンジしたい人には向いている職場だと思いますし、私たちが求めているのも自律型の人材です。自ら課題を発見して、それを克服する、改善するようなアクションを起こせる。そんな意識を持った人に出会いたいと思っています。

美大出身者に期待することは?

美大での学びのなかで、きっとそれぞれに独自の感性を育んでこられていると思います。その感性が、仕事へのこだわり、商品開発へのアイデア、空間デザインの力など、いろいろな形で生きてくるはずです。開発職、特にアイスクリーム開発とは大学で専門的に学んだという学生は基本的にいません。だからどんな学部でもフラットに、入社してから一から学ぶことになります。

採用の場は、とても限られた時間のコミュニケーションです。だからこそ、その場で言わなければ伝わりません。自分の魅力や強みを、臆せずにどんどんアピールしてください。

VOCA展2026にて本学卒業生がVOCA賞・佳作賞を受賞

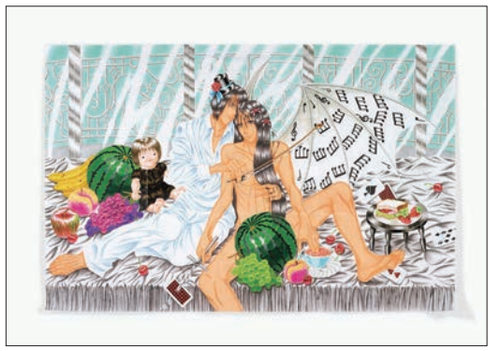
このたび、現代美術の登竜門として知られる『VOCA展2026 現代美術の展望 ―新しい平面の作家たち』（主催：公益財団法人日本美術協会 上野の森美術館／特別協賛：第一生命保険株式会社）が開催され、本学卒業生の戸田沙也加さん（大学院美術専攻洋画研究領域 修了）が最高賞の「VOCA賞」を、加藤千晶さん（同研究領域 修了）が「佳作賞」を受賞しました。33回目を迎えた本展では、全国から推薦された24名の若手作家が出品。昨年の宮本華子さんに続き、本学卒業生が2年連続で最高賞を受賞する大変喜ばしいニュースとなりました。

3月13日（金）には会場の上野の森美術館にて授賞式・内覧会が行われ、特別企画としてシンポジウム「VOCAの現在 ―身体の記憶」も開催。多くの来場者を前に、作品に込めた想いやアートが社会に対して持っている力について語られました。

また、本学からは上記受賞者のほか、佐川梢恵さん（芸術学部デザイン・工芸学科ヴィジュアルデザイン専攻 卒業）も出品しました。

VOCA賞：戸田沙也加　≪語られざる者の残響≫
油彩、キャンバス、木製パネル、インクジェットプリント、
アルミ複合板、額 231.0×336.0×5.0cm

VOCA佳作賞：加藤 千晶　≪ゆらぐ輪郭、声の断片を拾う≫
毛糸、木製棒 240.0×363.0×5.0cm



佐川梢恵　≪いつか永遠をあなたと過ごす≫
鉛筆、パステル、油彩ボールペン、水生カラーペン、
セロハンテープ、コピー用紙　231.0×356.4×0.01cm

FACE2026にて本学卒業生がグランプリを受賞

公益財団法人SOMPO美術財団が主催する「FACE2026」にて、本学卒業生の吉田茉莉子さんがグランプリを受賞いたしました。

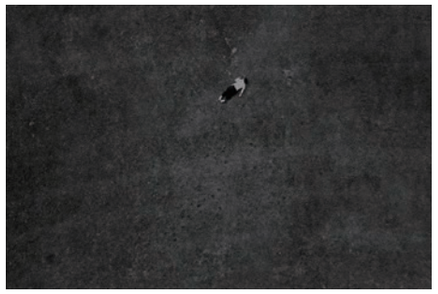
創設から今年で14回目を迎える「FACE」は、年齢・所属を問わない新進作家の登竜門となる公募コンテストとして定着しつつあります。全国各地1，271名の応募の中から、国際的に通用する可能性を秘めた、入選作品57点（内受賞作品9点）が選ばれ、本学芸術学部美術学科洋画専攻絵画コースの卒業生である吉田茉莉子さんがグランプリを受賞いたしました。また、他にも本学卒業生や在学生7名が入選いたしました。

入選作品は、2026年3月7日（土）～3月29日（日）の期間で、SOMPO美術館「FACE展2026」にて展示されました。

吉田茉莉子《天泣》 2025年 油彩・蜜蝋・カンヴァス 194×162㎝

潘逸舟先生 受賞報告

クリエイティブ・プロデュース表現領域の潘逸舟先生が、『第36回（2025年度）タカシマヤ文化基金 タカシマヤ美術賞』と『第6回 Tokyo Contemporary Art Award（TCAA 2026-2028）』を見事W受賞いたしました。今回の受賞を記念して、2026年11月下旬より、本学相模原キャンパス「JOSHIBI Space 1900」にて受賞記念展を開催する予定です。



「Not Ocean」（2024）
シングルチャンネル・ビデオ、16分23秒

「あなたと私の間にある重さ」（2022）
展示風景：「Art Collaboration Kyoto 2023」国立京都国際会館（2023）
撮影：守屋友樹

撮影：野村佐紀子

本学名誉理事長／名誉博士の大村智先生の「卒寿並びにノーベル生理学・医学賞受賞10周年記念式典・祝賀会」（学校法人北里研究所主催）が開催されました

2025年12月11日、本学名誉理事長及び名誉博士であられる大村智先生の「北里大学特別栄誉教授大村智先生の卒寿並びにノーベル生理学・医学賞受賞10周年記念式典」（学校法人北里研究所主催）が帝国ホテルにて開催されました。式典には学術界・関係団体から多数の来賓の方々が出席され、本学からも福下雄二理事長、小倉文子学長をはじめとする本学関係者が出席いたしました。式典では、浅利靖 学校法人北里研究所理事長の開会の辞から始まり、中村和彦 山梨大学学長、浜本隆之 学校法人東京理科大学理事長のご祝辞の後、大村先生と縁の深い3名の先生方（北里大学の山田陽城名誉教授、本学の小倉文子学長、認定NPO法人21世紀構想研究会の馬場錬成理事長）と大村先生による記念講演へと移りました。小倉学長による講演では、大村先生が本学理事長在任中に取り組まれた「創立100周年記念事業」や「大村文子基金の創設」といった本学における多大なるご尽力やご功績のご紹介のほか、片岡球子先生や堀文子先生、佐野ぬい先生といった本学の卒業生作家と大村先生との交流やエピソードなどについて振り返りました。記念講演の最後は「艱難辛苦を乗り越えて」と題し、大村智先生により、先生の幼少期から現在に至るまでの長きにわたる歩みから、数々の困難やご苦労、ご功績、そして人との出会いなどについて、詳細に渡りご講演いただきました。ご講演を通し、改めて大村先生のご研究の偉大さや、お人柄に触れられる機会となり、ご講演終了後、会場は盛大な拍手に包まれました。最後に、砂塚敏明北里大学学長による閉式の辞により、式典が終了し、続く祝賀会へと移りました。

RHEP難民教育推進協会 × 女子美術大学共創デザイン学科

本学共創デザイン学科が、産官学連携プロジェクトの一環として、一般社団法人RHEP難民教育推進協会のシンボルマークの制作・提案に取り組みました。

RHEP難民教育推進協会は、社会経済的な理由により日本の大学への進学が困難な、日本に在住する難民の背景を持つ人々のための奨学金制度「UNHCR難民高等教育プログラム（RHEP）」のさらなる発展と拡充を目的として、2025年に設立された団体です。

本プロジェクトでは、多様な背景を持つ人々の想いをひとつの形にすることを目指し、団体職員の方々との意見交換に加え、国内の大学で学ぶ各国出身のRHEP奨学生とのディスカッションを重ねながら、この新たな団体にふさわしいシンボルマークのデザイン提案を行いました。

採用されたデザインは、「学びを力に大きく飛躍する」をコンセプトに、下部の開かれた本で「学びを支える知識と考える力」を、上部の山で「挑戦と成長」を、光の差すようなカラーリングは「夢や自立へ続く未来の光」を表現し、あらゆる人々が支え合いながら困難を乗り越え、未来を切り拓いていくという願いが込められています。現在は、同協会のWebサイトや名刺など、さまざまな媒体に展開されています。

共創デザイン学科では、社会と連携した実践的な学びを通じて、デザインの力で社会課題に向き合う教育・研究活動を推進しています。

RHEP
難民教育推進協会
-Refugee Higher Education Program-

東彼杵ひとこともの公社 女子美術大学 共同プロジェクト

アート・デザイン表現学科スペース表現領域の2年生による実技授業「ヒューマンスペース演習Ⅰ」の一環として、長崎県東彼杵町の一般社団法人東彼杵ひとこともの公社と連携し、空き店舗となっていた旧森酒店のリノベーションプロジェクトを実施しました。学生たちは現地調査や住民への聞き取りを重ねながら、新たな用途や空間デザイン、ロゴ制作までを担当。地域住民が再び集えるコミュニティスペース「一郎縁（いちろうやん）」として再生しました。また、地元の方々に郷土料理づくりを教わり、学生たちも一緒に調理に参加。完成後のお披露目会では、大村寿司やだご汁を地域住民へ振る舞いました。空間づくりだけでなく、地域文化や人との関わりを学ぶ実践的な地域連携プロジェクトとなりました。

ドローイングセンターの取り組み

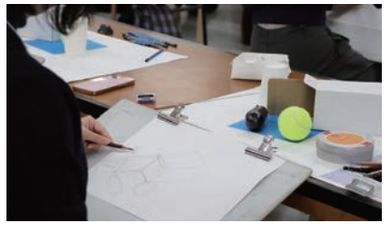
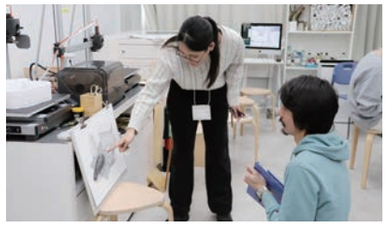
女子美術大学では、『描く行為』に特化した専門的な技術と知識を多角的に研究し、実践的に社会に還元するための施設としてドローイングセンターを設置しています。本センターでは、授業の空き時間や放課後の時間を使って、自由にデッサン力を鍛えることができるほか、モデルのクロッキー会や企業・講師を招いてのハイブリッドドローイング演習も企画しています。

特別講座
『キャンバス職人が語る-木枠と張りの技術-』

2025年12月8日、本学相模原キャンパスにて、特別講座『キャンバス職人が語る—木枠と張りの技術—』が開催されました。本講座は、木枠やキャンバス生地の製造を手掛けるマルオカ工業株式会社と、多彩な画材を展開するホルベイン画材株式会社の共同企画により実現したものです。講座では、木枠の種類やそれぞれの特徴をはじめ、下地材によるキャンバスの性質の違い、さらにはキャンバス張り金具を裏面に使用し、側面を美しく仕上げる「裏張りキャンバス」の実演とコツなど、プロの視点による高度な知識と技術を伝授いただきました。普段何気なく使用しているキャンバスの構造や素材への理解を深めることで、学生たちにとって今後の制作活動をより豊かにする貴重な機会となりました。

2026年4月入学者対象「入学前デッサン講座」

ドローイングセンターでは、入学までの期間をより有意義に過ごしていただくことを目的に、総合型選抜・学校推薦型選抜(指定校制)の合格者を対象とした「入学前デッサン講座」を開講しています。受講生は、A日程(卓上構成・鉛筆)、B日程(静物・鉛筆または木炭)、C日程(卓上構成・鉛筆)の中から希望のコースを選択し、3日間にわたりデッサン力の向上に取り組みました。講座では、初心者の方でも安心して学べるよう、道具の使い方や構図の取り方、モチーフの配置といった基礎から丁寧にレクチャーが行われました。制作中や最後の講評会では、講師が一人ひとりの作品に対して具体的なアドバイスを送り、参加者は熱心に耳を傾けていました。初日は緊張した様子のみなさんでしたが、最終日には参加者同士で打ち解け合い、春からの新生活に向けた和やかな交流の場となりました。

女子美クリエイティブ・ラボラトリー（通称：女子美ラボ）企画展

「JOSHIBI PORTRAITS ／ JOSHIBI LANDSCAPE」活動報告

「 JOSHIBI PORTRAITS 」

2022年以降、計10回の開催を重ね、延べ230名の学生が参加をしてきた本展は「PORTRAIT（肖像）」を単なる人物表現としてではなく、作家の「いま」を語る表現形式として捉え直し、女子美術大学に学ぶ学生たちが日々どのような視点で世界を見つめ、いかなる問いと対峙しながら制作に向き合っているかを広く社会へ提示することを目的としています。応募者数は継続的に増加しており、本展が学内における表現と対話の場として定着しつつあることを示しています。会期中は本学教員と学生によるギャラリートークを実施し、作品と鑑賞者のあいだに新たな思考や対話をひらく機会となりました。

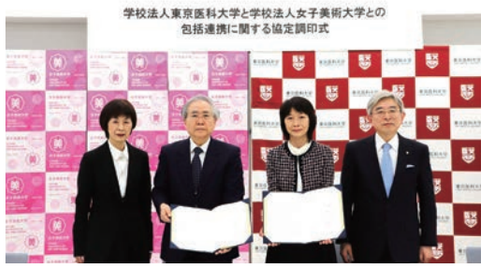
開催概要　2025年11月17日（月）～ 2025年11月22日（土）
開催場所　ギャラリー・ルデコ（渋谷）
参加人数　40名

「 JOSHIBI LANDSCAPE 」

女子美ラボと学内の有志による自主プロジェクト「社会彫刻の夕べプロジェクト」の共同企画として、2025年に第一回目となる展覧会を開催しました。本展は「LANDSCAPE（風景）」をテーマに、在学生・教員に加え職員も参加する、本学初の横断的な展示企画となり、計29名が出展しました。写真や映像、オブジェ、ドキュメントなど多様な表現が集い、立場や領域を越えた視点が交差する場を創出しました。会期中にはオンライン企画も実施し、作品と社会の関係について対話を深めることができました。

開催概要　2025年11月10日(月) ～ 2025年11月14日(金)
開催場所　ギャラリー・ルデコ（渋谷）
参加人数　29名

NEWS & TOPICS



（左から）学校法人女子美術大学　小倉文子 学長、福下雄二 理事長
学校法人東京医科大学　林 由起子 理事長、宮澤啓介 学長

01 学校法人女子美術大学と学校法人東京医科大学が包括連携協定を締結

学校法人女子美術大学と学校法人東京医科大学は、包括連携協定を締結しました。今後、病院等の各施設への作品提供による女子美生の芸術文化の発信と東京医大の来院者サービスの向上、医療施設の環境デザインへの参画による女子美生の実践的学習機会の創出と東京医大の医療空間の質向上、医療と芸術を融合した新たな教育・研究分野の開拓等、様々な価値の創出を期待できます。3月25日、女子美術大学相模原キャンパスにて、協定調印式が執り行われました。

02 2025年度100周年記念大村文子基金 授賞式

2025年度「100周年記念大村文子基金」による各賞の授賞式が、11月20日に杉並キャンパスで執り行われました。今年度は「女子美栄誉賞」を海老原嘉子さん（1961年芸術学部美術学科工芸科卒業）と髙部多恵子さん（1964年芸術学部美術学科図案科卒業）、「女子美パリ賞」を宮本華子さん（2012年大学院美術研究科美術専攻修士課程洋画研究領域修了）、「女子美ミラノ賞」を兪暁凱さん（大学院美術研究科美術専攻博士後期課程美術研究領域 2年次在籍）が受賞しました。本式典の概要と受賞者の詳細は本学WEBサイトをご覧ください。

https://www.joshibi.ac.jp/joshibi-news/news/3798

03 本学卒業生の小田井真美さんが第76回芸術選奨文部科学大臣賞（芸術振興部門）を受賞しました

撮影：クスミエリカ

芸術の各分野で優れた業績をあげた個人や団体を顕彰する芸術選奨にて本学卒業生で非常勤講師の小田井真美先生が文部科学大臣賞（芸術振興部門）を受賞しました。小田井先生は「さっぽろ天神山アートスタジオ」のAIR（アーティスト・イン・レジデンス）ディレクターとして、日本におけるAIR活動の発展と定着を牽引してきた第一人者です。日本のAIR活動の信頼性を国際的に高めた功績が高く評価され、今回の受賞に至りました。小田井先生は本学の学部共通科目「アーティスト・イン・レジデンス概論」を担当しており、世界中のAIRのケーススタディや実際の運営について、学生たちに指導を行っています。

https://www.sensho.go.jp/awards/r07.html

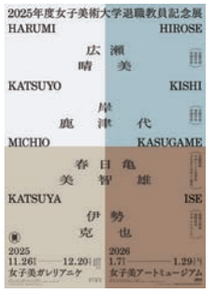
04 2025年度退職教員記念展

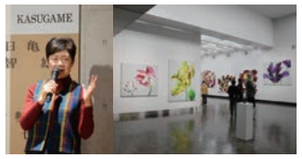
2025年度退職される4名の先生方の作品を展示し、杉並・相模原両キャンパス間での「巡回展」の形式で開催。それぞれ初日にはオープニングセレモニーが開催され、縁のある卒業生や教職員が多く集まりました。

○出品者
芸術学部 美術学科 洋画専攻　広瀬晴美 教授
芸術学部 美術学科 洋画専攻　岸 鹿津代 教授
芸術学部 デザイン・工芸学科
プロダクトデザイン専攻　春日亀美智雄 教授
短期大学部 造形学科 デザインコース　伊勢克也 教授

○杉並（女子美ガレリアニケ、110周年記念ホール）
2025年11月26日（水）～12月20日（土）
※12月6日、13日、日曜日休廊

○相模原（女子美アートミュージアム）
2026年1月7日（水）～29日（木）
※日曜祝日休館





芸術学部 美術学科 洋画専攻　広瀬晴美 教授

芸術学部 美術学科 洋画専攻　岸 鹿津代 教授

芸術学部 デザイン・工芸学科
プロダクトデザイン専攻　春日亀美智雄 教授

短期大学部 造形学科
デザインコース　伊勢克也 教授

05 本学環境デザイン専攻教授の横山勝樹先生が退職記念書籍「環境イメージのデザイン」を出版しました

本学 環境デザイン専攻教授の横山勝樹先生が2025年度をもって退任されるにあたり、先生のこれまでの歩みと研究成果を広く紹介するため、書籍「環境イメージのデザイン」を出版されました。横山先生は長年にわたり本学の教育・研究にご尽力され、多くの学生の育成に多大なる貢献をされてきました。2026年2月25日には、本学相模原キャンパスにて、退職および書籍出版を記念したパーティーが開催されました。横山先生からの挨拶では、書籍に収まりきらなかったエピソードとして、過去の学生による印象的な作品のお話がありました。必ずしも成績として高い評価を受けた作品ばかりではなかったものの、だからこそ強く記憶に残っている――そんな先生の率直なお話に、参加者は静かに耳を傾けていました。先生からは「もし増版が実現するなら、今回お話しした“第10章”としてぜひ加えたい」との言葉もあり、今後への期待が高まるひとときとなりました。また、ご自身の若き日の体験談についても触れられ、この場でしか聞くことのできない貴重なお話に会場は笑いと驚きが広がりました。本書の装丁デザインを担当された本学非常勤講師でありイラストレーターの中川理美子先生にもご登壇いただきました。専門書でありながら明るく親しみやすいデザインに仕上げた背景や、横山先生と中川先生それぞれの狙いについてご紹介いただきました。さらに、装丁や挿絵の一つひとつが本書の内容とリンクしていることも解説され、本書に込められた細やかな工夫と想いが改めて共有されました。会場では、配布された書籍を手にした参加者が横山先生にサインを求め、列を成しました。一人ひとりと言葉を交わしながら丁寧にサインをされる先生の姿が印象的で、会場は温かな交流の場となりました。

「環境イメージのデザイン」
定価：1,500円＋税
発売日：2026年2月2日
出版社：技報堂出版
ISBN：978-4-7655-2660-9

https://gihodobooks.sslserve.jp/book/2660-9.html

08 『Re:Decorative Arts（仮称）町田市立国際工芸美術館 × 女子美術大学展』を開催

本学工芸専攻が2025年度に実施した町田市立博物館（2029年に町田市立国際工芸美術館として開館予定）との連携授業の成果を紹介する展覧会が町田市立国際版画美術館・市民展示室にて開催されました。陶・ガラスを学ぶ学生たちは、博物館所蔵作品を題材に、技術や意匠に加え、制作当時の社会的・文化的背景について理解を深めながら、各時代や民族間における工芸の意味や価値を検討しました。そこからもっとも刺激を受けた作品をもとにして、自らの表現へと昇華。技法、形態、色彩、文様、用途、作品にまつわるエピソードなど、それぞれが何に惹かれ、何を汲み取ったのか。「工芸とは何か」という問いに向き合った、学生一人ひとりの多彩な作品が会場に並びました。会期最終日にはギャラリートークも行われ、多くの来場者で賑わいました。

09 本学在学生が韓国の国際コンペティション「AI+X Soul Mate Pioneers」に参加

本学メディア表現領域の在学生が、協定校の韓国成均館大学にて開催された、AIを活用した国際コンペティション「AI+X Soul Mate Pioneers」に参加しました。本大会にはアジア圏の大学から15チームが集まり、各国の学生が最先端のAI表現や技術を競い合いました。本学からは、AIを活用した作品制作を行っている「ロボット研究プロジェクト」内で事前にコンペを実施し、選抜されたメディア表現領域の1年生2名が出場しました。現地では、アジア各国から集まった大勢の観客や審査員の前で、英語によるプレゼンテーションを堂々と行い、作品のコンセプトや女子美らしいかわいいロボットの魅力をしっかりと発信しました。残念ながら受賞には至りませんでしたが、国際的な舞台で自分たちの企画を発表し、各国の他大学の学生と交流する貴重な経験となりました。

06 「女子美術大学 × 城山保育園」ワークショップを開催しました

今年4月に開園した相模原市立城山保育園において、本学の有志の学生が企画、デザインした「玩具」を使ったワークショップを開催しました。今回使用した玩具は、城山保育園の前身である城山幼稚園の園庭に生育していた桜の木を材料として使用しており、昨年の夏に相模原市内の保育園を2度にわたりリサーチし、その後企画、デザインしたものを一般社団法人さがみ湖 森・モノづくり研究所/MORIMO様の協力を得て完成させ、開園の記念品として寄贈したものです。城山保育園の園児と学生が一緒に作品を使って遊ぶことで、美術表現の楽しさを感じられる機会となりました。また、城山保育園に設置されたピクトサインの一部は前身の城山幼稚園の卒園生でもある本学芸術学部美術学科美術教育専攻4年生の高橋万葉さんがデザインを担当しました。

07 短期大学部テキスタイルの学生たちによるイベント『TEXTILE VILLAGE』が開催

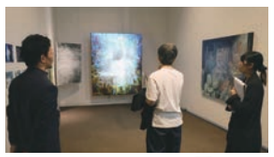
3月14日（土）、下北沢の「BONUS TRACK」にて、本学短期大学部造形学科デザインコースでテキスタイルを学ぶ学生たちによる企画展『TEXTILE VILLAGE』が開催されました。本イベントは、企画・広報から当日の運営にいたるまで、すべて学生たちが主体となって行われました。会場では、日頃の学びの成果であるテキスタイル作品を中心に、オリジナルアクセサリーやキャラクター作品、ポストカード、さらに企業とのコラボレーション作品など、多岐にわたる作品の展示・販売に加え、来場者参加型のワークショップも実施しました。当日は多くの来場者で賑わい、作品が次々と手に取られていく活気ある一日となりました。自身の作品を社会に発信するだけでなく、自ら企画・運営を経験することで、実践的な積極性を養う貴重な機会となりました。

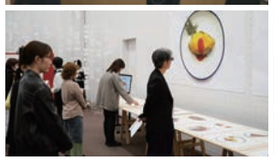
東京都美術館とオンラインにて開催、JOSHIBISION 2025

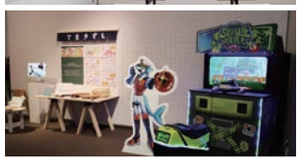
本学大学院・芸術学部・短期大学部の各研究室から選抜された作品、および付属高等学校の卒業制作を一同に展示する「JOSHIBISION2025 ―アタシの明日―」が2026年3月1日～5日（付属高等学校は6日）まで東京都美術館にて開催されました。

「JOSHIBISION」とはJOSHIBI×EXHIBITION×VISIONをつないだ造語で、「いまを生きる、等身大の学生たちのさまざまな視点が集まり、ともに未来を見つめていこう」というメッセージが込められています。3月3日にはゲスト審査員として、澁谷克彦氏（本学客員教授）、説田礼子氏（エルメス財団キュレーター）、森司氏（本学特別招聘教授）をお招きし、1作品ずつ特別賞を選定、講堂にて授賞式を行いました。その後、美術館内のレストランにて、出展学生、審査員、本学の教職員に加え、協定大学や関係企業、美術館・ギャラリーの関係者など、150名以上が集まり、レセプションパーティーを開催しました。出展学生を中心に、アート・デザインを通じて交流を深め、新たな刺激を得る有意義な時間となりました。

「JOSHIBISION2025 ―アタシの明日―」
オンライン展示（大学院・学部・短大のみ）
https://joshibision.com/



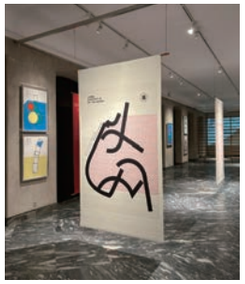


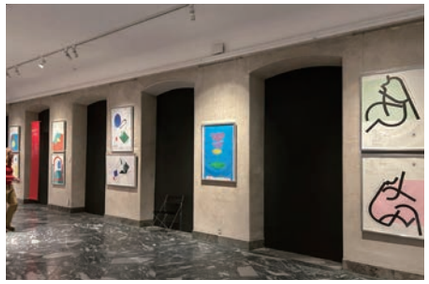


付属高等学校
卒業制作展

林規章教授の手がけた本学ポスターが デザインミュージアム・デンマークにて展示されました

デンマーク・コペンハーゲンのDesignmuseum Danmark（デザインミュージアム・デンマーク）にて、公益財団法人DNP文化振興財団との共催による展覧会「Japan Modern Poster」が開催され、本学芸術学部デザイン・工芸学科ヴィジュアルデザイン専攻の林規章教授がデザインした本学ビジュアルポスターが展示されました。この展示は、公益財団法人DNP文化振興財団が収蔵する「DNPグラフィックデザイン・アーカイブ」のポスター作品を通じて、日本のグラフィックデザインの発展の軌跡を紹介・探究するもので、日本を代表するグラフィックデザイナー48名の作品が出展。展示は、戦後から現在までの日本のグラフィックデザインの変遷を5章に分けて構成されており、林先生の作品は美術館入口のインフォメーションと「第5章：世代を超えた共存と実験的ポスターの展開（1990年代～）」にて展示されました。





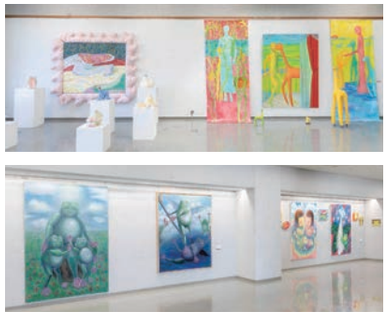
柚木沙弥郎先生の緞帳 「とどろき」が100回記念・国展に特別展示されました

1966年、横浜スタジアムの設計などで知られている建築家・吉原慎一郎氏の依頼により、神奈川県電業会館（横浜市）の講堂のための緞帳を、本学元学長である柚木沙弥郎先生が制作されました。2022年、老朽化した建物の取り壊しとともに廃棄されるはずであったこの緞帳を運び出し、2年の歳月をかけ、本学で「柚木沙弥郎　緞帳再生プロジェクト」を立ち上げ、多くの方々の協力を得ながら修復を行いました。フックド・ラグという技法で制作された縦約4メートル、横約6メートルの緞帳は、柚木先生にとって無二の作品であり、先生がどうしても救い出したかった作品でした。この度、100回記念・国展（国立新美術館：4月29日～5月11日）にて、修復された緞帳「とどろき」がお披露目され、多くの来場者に観ていただくことができました。

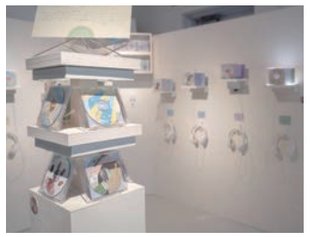
2025年度 卒業制作展／修了制作展 開催

本学大学院・芸術学部・短期大学部の2025年度卒業制作展／修了制作展が杉並と相模原の両キャンパスにて行われました。芸術学部と短期大学部は2026年3月7日～9日、大学院の展示は3月7日～14日の期間で開催。杉並キャンパスではスペース表現領域と共創デザイン学科の授業成果展も同時開催されました。4年間、あるいは2年間の学生生活の集大成として、それぞれの想いが詰まった力作が多く展示されました。

SAGAMIHARA CAMPUS



SUGINAMI CAMPUS



本展の開催にあわせて、アート・デザイン表現学科スペース表現領域と共創デザイン学科でも授業成果展が行われました。

共創デザイン学科

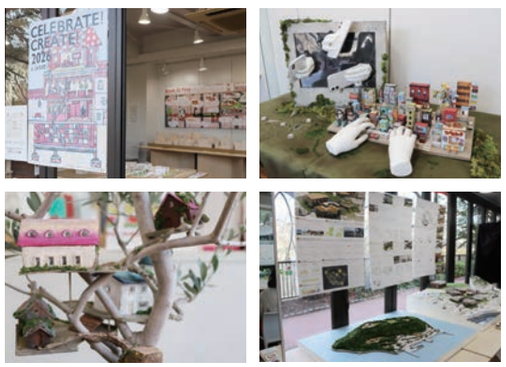
アート・デザイン表現学科スペース表現領域

2025年度 学外卒業・修了制作展

2026年1月から各学科・専攻・領域・コースごとに行われました学外での卒業・修了制作展の様子をご紹介いたします。学生生活の集大成である卒業・修了制作を見るために、在学生や保護者、卒業生などが会場を訪れました。

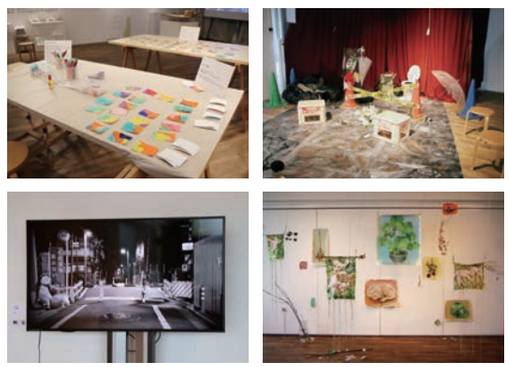
芸術学部 デザイン・工芸学科
環境デザイン専攻
卒業制作展「CELEBRATE!CREATE! 2026」

会期：1月24日～1月26日
会場：レンタルスペースさくら　中目黒／目黒川沿い（東京都目黒区）



芸術学部 アート・デザイン表現学科
アートプロデュース表現領域
卒業制作・修了研究展「あらむしゃプロムナード」

会期：1月15日～1月27日
会場：ガレリアニケ（東京都杉並区）



芸術学部 デザイン・工芸学科
プロダクトデザイン専攻
卒業制作展「ひだまり」

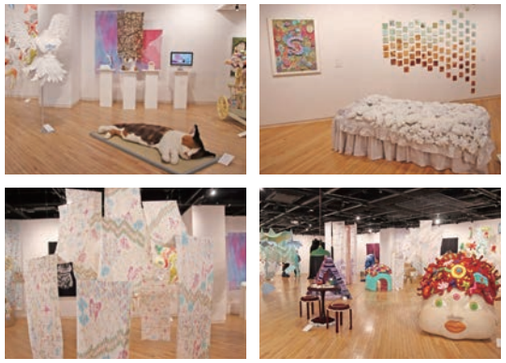
会期：2月11日～2月15日
会場：横浜赤レンガ倉庫（神奈川県横浜市）

芸術学部 美術学科
美術教育専攻
第11期生卒業制作展「continued.」

会期：2月5日～2月8日
会場：町田市民ホール ギャラリー（東京都町田市）

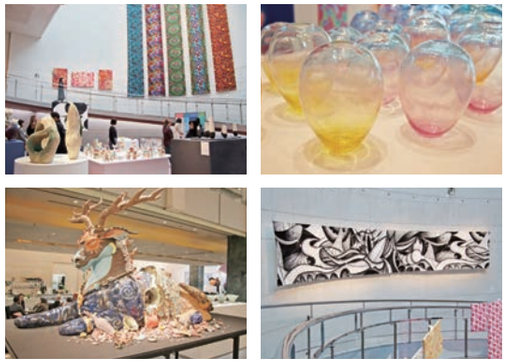
短期大学部 造形学科
デザインコース テキスタイルデザイン
卒業・修了制作学外展

会期：2月12日～2月15日
会場：AXIS GALLERY（東京都港区）



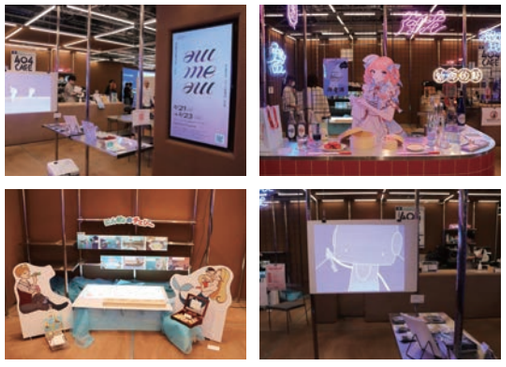
芸術学部 デザイン・工芸学科
工芸専攻
卒業・修了制作展2026

会期：2月11日～2月15日
会場：Spiral Garden（東京都港区）



芸術学部 アート・デザイン表現学科
メディア表現領域
卒業制作有志展「mememe」

会期：2月21日～2月23日
会場：404 Not Found（東京都渋谷区）

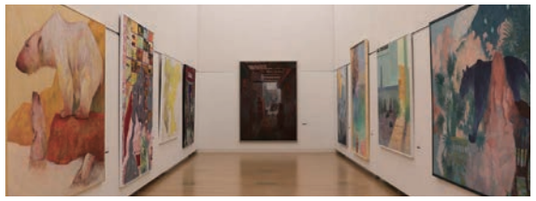


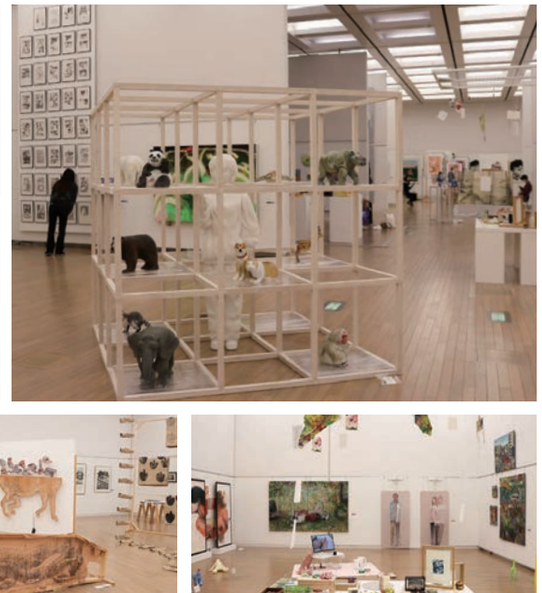
芸術学部 デザイン・工芸学科
ヴィジュアルデザイン専攻
卒業制作有志展「SPECTRUM」

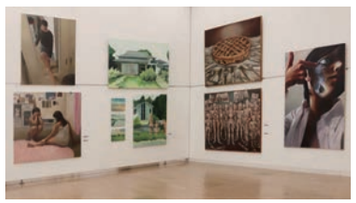
会期：2月13日～2月15日
会場：町田パリオ（東京都町田市）

令和７年度・第49回 東京五美術大学 連合卒業・修了制作展 開催

2026年2月20日～3月1日の休館日を除く9日間に渡り、東京五美術大学（武蔵野美術大学・多摩美術大学・東京造形大学・日本大学芸術学部・女子美術大学）の美術系学科による卒業・修了制作展「東京五美術大学 連合卒業・修了制作展」が国立新美術館にて開催されました。今年は五美大展合同企画として、講演会「蘇るレオナルド・ダ・ヴィンチ 美大にしかできない先端研究」を開催。今年も五美術大学の個性がつまった作品が一堂に会し、来場者を魅了しました。

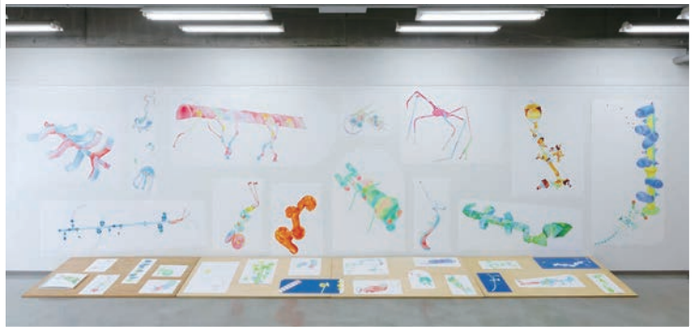






女子美術大学美術館賞

修了制作及び卒業制作が優秀な学生に授与される女子美術大学美術館奨励賞 受賞者の中から１名に「女子美術大学美術館賞」が授与され、賞状と副賞が贈られました。また、選抜作品は女子美術大学美術館に収蔵されます。



『Product Creatures』樋口めい
芸術学部 デザイン・工芸学科
ヴィジュアルデザイン専攻

順天堂 佐藤志津・小川秀興賞

学校法人順天堂と本学は連携・協力に関する協定を締結しており、その一環として2016年度より優秀な卒業・修了制作に対して「佐藤志津・小川秀興賞」を授与いただいております。本年度は以下の学生が受賞し、賞状と副賞が贈られました。選出された作品は順天堂大学内に1年間展示されます。

2025年度 特別賞

『雨上がり』市川千尋
芸術学部美術学科洋画専攻（絵画）

『きみとあの公園』柏木素葉
芸術学部美術学科日本画専攻

『よまちのはな』佐野蓮夏
芸術学部美術学科日本画専攻

東京理科大学賞

学校法人東京理科大学と本学は連携・協力に関する協定を締結しており、その一環として2015年度より優秀な卒業制作に対して「東京理科大学賞」を授与いただいております。本年度は以下の学生が受賞し、賞状と副賞が贈られました。選出された作品は東京理科大学内に1年間展示されます。

東京理科大学
学長賞

『愛していました』北村美央子
芸術学部美術学科日本画専攻

東京理科大学
坊っちゃん賞

『宿り実小蜂 -Malum blastophaga-』（左）
『共生する地衣類』（右）大嶋希歩
芸術学部美術学科洋画専攻（版画）

東京理科大学
マドンナ賞

『やさしい違和感』重田 萌
芸術学部美術学科洋画専攻（絵画）

JAM　女子美アートミュージアム展覧会情報

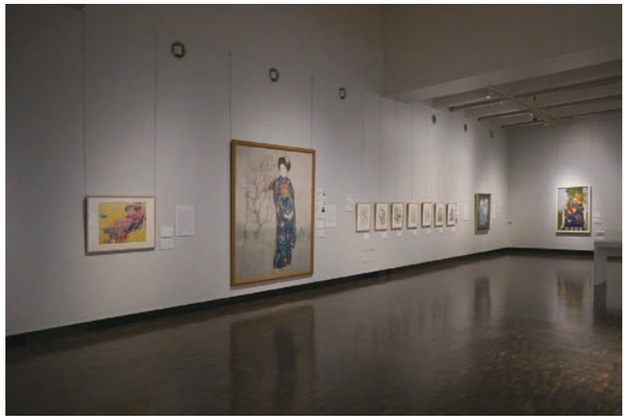
展覧会報告　PICK UP

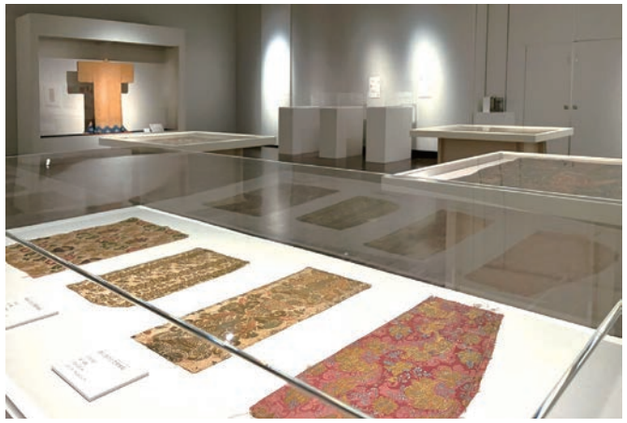
女子美アートミュージアム開館25周年記念

女子美の先達たちと女子美染織コレクション展 植物図鑑「春」

2026.3.25(水) – **4.28**(火)

相模原キャンパス（女子美アートミュージアム）





会場風景

2001年の開館以降、女子美アートミュージアムでは本学にゆかりの作品はもとより、教育研究資源としての美術品や工芸品、歴史資料など、時代や文化を超えた幅広い分野にわたる資料収集を行ってきました。そうした活動を伝えるために、例年、学内関係者向けに「女子美の先達たちと女子美染織コレクション展」を開催してきましたが、2025年度より一般公開しています。

女子美の卒業生や、関係の深い作家の作品からなる女子美コレクションからは、柿内青葉の《十六の春》をはじめ絵画20点、女子美染織コレクションからは日本の打掛・裂のほか、世界中のさまざまな地域・時代の染織資料23点を出展しました。

また、今年度は相模原麻溝公園との連携展示をスタートし、公園で植物を扱う専門職員のみなさんに、作品に登場する植物の豆知識コメントを寄せていただきました。会期中に麻溝公園で見られる植物を紹介したほか、美術館と公園をめぐるギャラリートークツアーも実施。展示室の中だけではなく、春の日差しの中に息づく草木の美しさをも味わっていただける展覧会となりました。

相模原麻溝公園との連携展示　豆知識のパネル

ギャラリートークツアー（3月27日実施）

展覧会報告

JAM

2025年度女子美術大学退職教員記念展
2026.1.7(水) – **1.29**(木)
2025年度に本学を定年退職される実技系教員の作品を展示しました。

2025年度 女子美術大学大学院博士後期課程研究作品発表会
2026.2.12(木) – **2.18**(水)
2025年度に大学院博士後期課程を修了した学生の作品・研究成果を展示しました。

2025年度 女子美術大学大学院博士前期課程修了制作作品展
2026.3.7(土) – **3.14**(土)　※3月8日(日)特別開廊 ※3月12日(木)、13日(金)休廊
2025年度に大学院博士前期課程を修了した学生の修了制作作品を展示しました。

女子美アートミュージアム開館25周年記念
女子美の先達たちと女子美染織コレクション展 植物図鑑「春」
2026.3.25(水) – **4.28**(火)
柿内青葉の《十六の春》をはじめ、春の植物にまつわる選りすぐりの絵画・染織作品を紹介しました。

女子美ガレリアニケ

女子美術大学 芸術学部 アート・デザイン表現学科
アートプロデュース表現領域 卒業制作・修了研究展2025 あらむしゃプロムナード
2026.1.15(木) – **1.27**(火)
アート・デザイン表現学科　アートプロデュース表現領域4年生、大学院博士前期課程2年生による卒業制作・修了研究展を開催しました。

2025年度
女子美術大学大学院博士前期課程修了制作作品展
2026.3.7(土) – **3.14**(土)　※3月8日(日)特別開廊 ※3月12日(木)、13日(金)休廊
2025年度に大学院博士前期課程を修了した学生の修了制作作品を展示しました。

歴史資料展示室

2025年度 新収蔵資料展
2025.9.10(水) – **2026.3.14**(土)　※休室日 火・日・祝日、年末年始（12月28日～1月5日）
2024年度に収蔵した新資料を展示公開しました。

展覧会予告

JAM

女子美アートミュージアム開館25周年記念特別展
「堀文子の出発点～女子美からはじまる写生帖・下図・本画～」展
［前期］**2026.5.22**(金) – **6.27**(土)
［後期］**2026.7.2**(木) – **8.4**(火)
※但し初日5月22日は11:00開館
※休館日：日曜・祝日
※特別開館：7月19日(日)、7月20日(月・祝)

「Rethink－舘鼻則孝と手しごと－」展
2026.9.10(木) – **10.6**(火)　※休館日：日曜・祝日
舘鼻則孝活動15周年記念として「手しごと」に焦点をあてた作品を展示します。

令和8年度第46回 造形「さがみ風っ子展」
2026.10.23(金) – **10.25**(日)　※会期中無休
南区会場として、相模原市内小中学生の造形作品を展示します。

女子美アートミュージアム開館25周年記念
女子美染織コレクション展 Part14 「女子美更紗帖」
2026.11.4(水) – **12.8**(火)　※休館日：日曜・祝日
女子美染織コレクションの中から、インド更紗を中心に展示します。

令和8年度神奈川高等学校総合文化祭
第73回高等学校美術展
2026.12.16(水) – **12.20**(日)　※会期中無休
神奈川県内高校生の美術作品、安全振興会ポスター原画コンクールの受賞作品等をJAM、相模原キャンパスの各所に展示します。

女子美ガレリアニケ

ニケキュレーターズセレクション#10 半澤友美
それは昨日だったのかもしれないね　It might have been yesterday.
2026.5.15(金) – **6.19**(金)　※日曜休廊
本学立体アート学科卒業。気鋭の作家半澤友美をご紹介します。

女子美術大学短期大学部1年前期科目「基礎造形2026」展
2026.7.8(水) – **7.24**(金)　※日曜休廊
自由選択授業で制作された基礎造形13講座の学生作品を展示します。

女子美スピリッツ 2026 柳千代子
ある日・ある時　人体のフォルムに魅せられて　60余年…
2026.9.11(金) – **10.31**(土)　※日曜休廊
1965年に本学芸術学部洋画科を卒業した画家柳千代子による作品展です。

2026年度女子美術大学退職教員記念展
2026.11.25(水) – **12.19**(土)
2026年度に本学を定年退職される実技系教員の作品を展示します。

歴史資料展示室

※2026年度よりキャンパス整備計画により長期休室となります。

女子美術大学広報誌

発　　行　学校法人女子美術大学
〒166-8538
東京都杉並区和田1-49-8
企画・編集　総務企画部広報グループ
監修担当　佐藤真澄・松山智一
デザイン協力　株式会社 Kitchen Sink.
印　　刷　株式会社ヒーローズ
発 行 日　2026年6月19日

Ⓒ2026 学校法人女子美術大学

広報グループでは女子美のニュースを募集しています。お気軽に下記までお知らせください。また、本誌の定期購読をご希望の方はお送り先を広報グループまでご連絡ください。

広報グループ
TEL 042-778-6123
E-mail prs@venus.joshibi.jp
URL https://www.joshibi.ac.jp/